

古詩十九首  
第一首

行行重行行  
與君生別離  
相去萬餘里  
各在天一涯  
道路阻且長  
會面安可知  
胡馬依北風  
越鳥巢南枝  
相去日已遠  
衣帶日已緩  
浮雲蔽白日  
遊子不顧返  
思君令人老  
歲月忽已晚  
棄捐勿復道  
努力加餐飯

ゆきゆき 重ねてゆきゆく、  
きみ い 君と生きながら別離す。  
あいさ 相去ること 萬餘里、  
おのおのてん いちがい あ 各々天の一涯に在り。  
どうろ へだた か なが 道路 阻り且つ長し、  
かひめん いっ 會面 安くんぞ知る可き。  
こば ほくふう よ 胡馬は北風に依り、  
えちよう なんし す 越鳥は南枝に巢くう。  
あいさ ひすて とお 相去つて 日已に遠く、  
いたい ひすて ゆる 衣帯 日已に緩む。  
ふうん はくしつ おお 浮雲は白日を蔽い、  
ゆうし こへん 遊子は顧返せず。  
きみ おも 君を思えば 人をして老いせしむ。  
さいげつ たちま すで くれ 歲月は 忽ち已に晩る。  
きえん まい なか 棄捐せらるるも 復た道う勿からん。  
どりよく さんはん くわ 努力して 餐飯を加えよ。

あなたは遠く旅立つて、さらに遠くへと行つてしまひ、私は生きて別離することに悲嘆しています。  
万里を隔てて、離れ離れになり、まるで、それぞれが天の一方に住んでいるようです。  
道は隔たつて、果てしなく遠く、再び会える日を知る由もありません。  
胡馬は北風を懐かしみ、越の鳥は南の枝を好んで巢くうと申します。(あなたは私を恋しいとは思わないのでしょうか)  
離れ離れになつて、月日も遠く過ぎ、悲しさで身はやせ細り、衣の帯も緩くなつてしまいました。  
浮雲が二人を隔てるかのように日の光を覆い隠し、あなたを私を顧みない。  
あなたのことを思うと、悲しみで老いてしまひそうです。  
歲月が過ぎ去るのは早く、私も同じように歳をとつていくのです。  
わが身が棄てられたとしても、もう何も言うことはありません。  
努めて食事をとり、お体を大切になさいますように。

古詩十九首  
第二首

青青河畔艸  
鬱鬱園中柳  
盈盈楼上女  
皎皎當窓牖  
娥娥紅粉粧  
織織出素手  
昔為倡家女  
今為蕩子婦  
蕩子行不歸  
空牀難獨守

せいせい かはん くさ  
青青たる河畔の艸、  
うつつ えんちゆう やなぎ  
鬱鬱たる園中の柳。  
えいせい ろうじょう おんな  
盈盈たる楼上の女、  
きょうきょう そうよう あ  
皎皎として窓牖に当たる。  
かが こうふん よそおい  
娥娥たる紅粉の粧、  
せんせん そしゆ いだ  
織織として素手を出す。  
むかし しょうか じよ な  
昔は 倡家の女と為り、  
いま どうし つま な  
今は 蕩子の婦と為る。  
どうし ゆ かえ  
蕩子 行きて帰らず、  
くうしゅう ひと まも かた  
空牀 独り守ること難し。

青々とした河畔の草、  
鬱蒼とした園の柳。  
楼閣の上には、艶やかな女が、輝くよう  
な色白の姿を窓辺に寄せている。  
美しく化粧し、か細く白い手が見える。  
この女、昔は娼家の遊女となり、今は遊  
び人の妻となっている。  
道楽者の男はどこかへ行ったまま帰え  
らず、女は一人寝の寂しさに耐えられ  
ないようだ。

古詩十九首  
第三首

青青陵上栢  
磊磊礪中石  
人生天地間  
忽如遠行客  
斗酒相娛樂  
聊厚不為薄  
驅車策駑馬  
遊戲宛與洛  
洛中何爵爵  
冠帶自相索  
長衢羅夾巷  
王侯多第宅  
兩宮遙相望  
雙闕百余尺  
極宴娛心意  
戚戚何所迫

せいせい りょうじょう ばく  
青青たる 陵 上の栢、  
らいらい かんちゅう  
磊磊たる 礪 中の石。  
ひと てんち かん いく  
人の天地の間に生るや、  
こう こと  
忽として 遠行の客の如し。  
としゅ あ ころく  
斗酒 相い娛樂して、  
しほく あ  
聊く厚しとして薄しと為さざらん。  
くろま か どば むちう  
車を駆り 駑馬に策ちて、  
えん らく ゆうぎ  
宛と洛とに遊戲す。  
らくちゅう なん うつう  
洛中 何ぞ爵爵として、  
かんにいおのずか あ もじ  
冠帯 自ら相い索む。  
ちよく きょうこう つら  
長衢 夾巷を羅ね、  
おうこう ていたくおほ  
王侯 第宅多し。  
りょうくう はる あ のぞ  
兩宮 遙かに相い望み、  
そくけつ ひやくよせき  
雙闕 百余尺。  
えん きわ しんい たの  
宴を極めて心意を娛しましめば、  
せきせき なん せま ところ  
戚戚として 何の迫る所ぞ。

丘の上の青々とした栢の木や、ころころとした谷川の石は悠久の時を過こしている。  
一方、人が天地の間に送る人生は、急いで遠くへ過ぎ去る旅人のようなものだ。だから、一斗の酒があれば、互いに酌みかわし、これを喜びとして、不足などとは言うまい。  
車を駆って、駑馬に鞭打ち、宛（後漢の南都）や洛陽に遊びに行こう。  
洛中では人が多く華やかで、衣冠束帯姿のお偉方が互いに訪問しあっている。  
四方に通じる長い大通りには小路が連なっており、王侯の邸宅も多い。  
南北の宮殿は遙かに遠く向い合い、各々の両側にある楼の高さは百余尺もある。  
この華やかな都で、酒宴を催して心から楽しめば、寂寥たる人生の憂いなど消え失せてしまっだらう。

古詩十九首  
第四首

今日良宴會  
歡樂難具陳  
彈箏奮逸響  
新聲妙入神  
令德唱高言  
識曲聽其真  
齊心同所願  
含意俱未伸  
人生寄一世  
奄忽若塵埃  
何不策高足  
先拋要路津  
無為守窮賤  
轉軻長苦辛

今日の良宴會、

歡樂 具には陳べ難し。

箏を弾じて逸響を奮い、

新聲の妙 神に入る。

令徳 高言を唱えば、

曲を識りて其の真を聴く。

心を齊しくし、願う所を同じくするも、

意を含んで俱に未だ伸びず。

人生の一世に寄せること、

奄忽として塵埃の若し。

何ぞ高足に策うたず、

先づ要路の津に拋るや。

無為に窮賤を守らば、

轉軻して 長に苦辛す。

今日のすばらしい宴會、

その歡樂は言葉に尽くし難い。

箏(十三弦の琴)が弾かれればすばらし

い音が響きわたり、初めて聞く曲の妙は

人間わざとも思えない。

地位の高い人が高尚な歌を歌えば、曲

を識る者はその真意を理解する。

心情と願いを同じくする宴會の出席者

達も、歌の意味を読み取ったからといっ

て皆が同じように出世するわけではな

い。

人生のはかなさは、風に吹かれる塵のよ

うなものだ。

どうして(駿馬に鞭をあてるように)自

分の才能を磨かずに、人に先んじて要

職への足がかりを求めることができよう

か。

何の努力もせずに貧賤を守るなら、不

遇のまま生涯苦しむことになる。たう

う。

古詩十九首  
第五首

西北有高樓  
上與浮雲齊  
交疏結綺窗  
阿閣三重階  
上有弦歌聲  
音響一何悲  
誰能為此曲  
無乃杞梁妻  
清商隨風發  
中曲正徘徊  
一彈再三歎  
慷慨有餘哀  
不惜歌者苦  
但傷知音稀  
願為雙黃鶴  
奮翅起高飛

せいほく こうろうあ  
西北に高樓有り、  
うえ ふうん ひと  
上は浮雲と齊し。  
こうそ  
交疏せる結綺の窓、  
あかくさんじゅう かい  
阿閣三重の階。  
うえ げんか こえ  
上に弦歌の声あり、  
おんきょう いっ なん かな  
音響一に何ぞ悲しき。  
だれ よ こ きょく な  
誰が能く此の曲を為す、  
すなわちきりょう つま  
乃杞梁の妻なる無からん。  
せいしやう かせ したが ほう  
清商は 風に随つて発し、  
ちゆうきょく まさ はいかい  
中曲にして正に徘徊す。  
いちたび だん さいさんたん  
一たび弾じて再三歎じ、  
こうがい よあいあ  
慷慨 余哀有り。  
かしゃ く お  
歌者の苦を惜しまず、  
ただ ちいん まれ  
但だ知音の稀なるを傷む。  
ねが  
願はくは雙黃鶴と為りて、  
つばさ ぶる た たか と  
翅を奮い 起つて高く飛ばんことを。

西北に高樓があり、上は浮雲に届かんばかりの高さだ。  
其の邸宅はすかし彫りに彩絹を結んだ飾り窓があり、四方屋根の三階建てである。  
上の方から絃歌の音が聞こえてくるが、その響きはなんと悲しいことであろうか。  
誰がこれほど悲しい曲を奏でているのか。  
きつと、戦死した夫の死を悲しみ、琴を弾き終わつた後、河に身を投げた杞梁の妻のような人ではあるまいか。  
心を揺さぶる澄んだ音色が風につれて徘徊する様な音色となる。  
一たび弾いては再三嘆き、悲しみは尽きる様子もない。  
歌う者は苦しさを惜しみはしない、ただ曲を解する人が稀なことに心が傷むのだ。  
この婦人も、叶うことなら、夫と共に黄鶴となり、翼を広げ空高く飛びたいに違いない。

古詩十九首  
第六首

涉江采芙蓉  
蘭澤多芳草  
采之欲遺誰  
所思在遠道  
還顧望舊鄉  
長路漫浩浩  
同心而離居  
憂傷以終老

こゝろ わた ふよう と  
江を渉り 芙蓉を采る、  
らんたく、ほうそうおほ  
蘭澤 芳草多し。  
これ と たれ おく  
之を采りて誰にか遣らんと欲するも、  
おも ところ えんどう あ  
思ふ所は遠道に在り。  
めぐりかえりみ きゆうきやう のぞ  
還 顧て 旧郷を望めば、  
ちやうろ まん こつごう  
長路 漫として浩浩たらん。  
どうしん りきよ  
同心にして離居せば、  
ゆうしやう ちゆう つい お  
憂傷して以て終に老いなん。

江水を渉つて蓮の花を採る。  
蘭草の沢には、芳しい匂いの多くの草花  
が多い。  
これを探つて誰かに送ろうと思うのだ  
が、我が思う人は遠い路の向こうにい  
る。  
振り返つて故郷の方角を眺めると、長い  
路が果てしもなく延々と続いている。  
愛し合いながら、離れ離れに暮らせば、  
憂いは心を傷つけ、終には老け込んでし  
まうだろう。

古詩十九首  
第七首

明月皎夜光  
促織鳴東壁  
玉衡指孟冬  
衆星何歷歷  
白露沾野草  
時節忽復易  
秋蟬鳴樹間  
玄鳥逝安適  
昔我同門友  
高舉振六翮  
不念携手好  
棄我如遺跡  
南箕北有斗  
牽牛不負輓  
良無盤石固  
虛名復何益

めいげつこう よるひか  
明月皎として夜光り、  
そくしよく とうへき な  
促織 東壁に鳴く。  
ぎょこう もうとう  
玉衡 孟冬を指し、  
しゅうせい なん れきれき  
衆星 何ぞ歴歴たる。  
はくろ やそう うるお  
白露 野草を沾し、  
じせつ たちま ま かわ  
時節 忽ち復た易る。  
しゅうせん じゆかん な  
秋蟬 樹間に鳴き、  
げんちよう さ いう  
玄鳥 逝りて安くにか適く。  
むかし わ どうもん とも  
昔 我が同門の友、  
こうきよ ぶくかく ぶる  
高舉して六翮を振ふ。  
て たすき よしみ おも  
手を携へ 好を念はず、  
われす いせき こと  
我を棄つること遺跡の如し。  
みなみ き きた とあ  
南には箕 北には斗有り、  
けんきゅう やく お  
牽牛 輓を負はず。  
まこ ばんしやく かた な  
良に盤石の固きこと無くんば、  
きよめい ま なん えき  
虚名 復た何の益かあらん。

名月は明るく夜を照らし、こおろぎが東の壁下で鳴いている。  
北斗七星の第五星・玉衡星は初冬の方角を指し、多くの星が列なつて輝いている。  
初秋の露は野の草をうるおし、時節はたちまち変わつていく。  
秋の蟬は木々の間に鳴いているが、燕はどこかへ飛び去つてしまった。  
昔、私の同門で、出世して高位の地位についた者がいる。  
かつて手を携えた親密な付き合いをしたことなど想いもせず、私を道に残した足跡のように顧みない。  
南には農具に見立てた箕の星、北にはひしゃくに見立てた斗星、それらは牽牛星が実際には車を引くくび木をかけられてはいないように、人が勝手に思い描いた虚像に過ぎない。  
ほんとうに盤石堅固な友情がなければ、同門という虚名だけではなんの役にも立たない。

古詩十九首  
第八首

冉冉孤生竹  
結根泰山阿  
與君為新婚  
兔絲附女蘿  
兔絲生有時  
夫婦會有宜  
千里遠結婚  
悠悠隔山陂  
思君令人老  
軒車來何遲  
傷彼蕙蘭花  
含英揚光輝  
過時而不采  
將隨秋草萎  
君亮執高節  
賤妾亦何為

ぜんぜん こせい たけ  
冉冉たる孤生の竹、  
ね たいざん くま むす  
根を泰山の阿に結ぶ。  
きみ しんこん な  
君と新婚を爲すは、  
とし じよら つ  
兔絲の女羅に附くなり。  
とししよ  
免絲生ずるに時有り、  
ふうふかい  
夫婦会するに宜有り。  
せんりとお こん むす  
千里遠く婚を結び、  
ゆうゆう さんば へた  
悠悠 山陂を隔つ。  
きみ おも ひと  
君を思へば人をして老いせしむ、  
けんしやなん きた おそ  
軒車何ぞ来ること遅き。  
いた か けいらん はな  
傷む彼の蕙蘭の花、  
えい かく こうき あ  
英を含みて光輝を揚ぐ。  
とき す と  
時を過ぎて采らずんば、  
まさ しゆうそう しほ したが  
將に秋草の萎むに随はんとするを。  
きみ まこと こうせつ と  
君 亮に高節を執らば、  
せんしゆうまたなに  
賤妾亦何をか為さん。

なよなよと孤生する竹があり、泰山のふところ根を張っています。あなたと結婚することは、免絲(草に付く蔓)が女蘿(木に付く蔓)にまとわりつくようなものです。免絲といえどもは生える時節があり、夫婦が会するにも相応しい時期があるものです。千里の距離を隔てて婚約したものの、二人の間は広大な山陂に隔てられています。あなたのことを思えば老け込むような気持ちなつてしまいます。迎える車が来るのがどうしてこんなに遅いのでしょうか。傷つきそうな蕙や蘭の花も、蕾を含んで色彩を放っています。時期を過ぎても採らなければ、秋草の枯れるのと時を同じくして萎んでしまいます。あなたが本当に独身を高潔とすると、私はどうすればいいのでしょうか。



古詩十九首  
第八首

冉冉孤生竹  
結根泰山阿  
與君為新婚  
兔絲附女蘿  
兔絲生有時  
夫婦會有宜  
千里遠結婚  
悠悠隔山陂  
思君令人老  
軒車來何遲  
傷彼蕙蘭花  
含英揚光輝  
過時而不采  
將隨秋草萎  
君亮執高節  
賤妾亦何為

ぜんぜん こせい たけ  
冉冉たる孤生の竹、  
ね たいざん くま むす  
根を泰山の阿に結ぶ。  
きみ しんこん な  
君と新婚を爲すは、  
とし じよら つ  
兔絲の女羅に附くなり。  
とししよ  
免絲生ずるに時有り、  
ふうふかい  
夫婦会するに宜有り。  
せんりとお こん むす  
千里遠く婚を結び、  
ゆうゆう さんば へた  
悠悠 山陂を隔つ。  
きみ おも ひと  
君を思へば人をして老いせしむ、  
けんしやなん きた おそ  
軒車何ぞ来ること遅き。  
いた か けいらん はな  
傷む彼の蕙蘭の花、  
えい かく こうき あ  
英を含みて光輝を揚ぐ。  
とき す と  
時を過ぎて采らずんば、  
まさ しゆうそう しほ したが  
將に秋草の萎むに随はんとするを。  
きみ まこと こうせつ と  
君 亮に高節を執らば、  
せんしゆうまたな  
賤妾亦何をか為さん。

なよなよと孤生する竹があり、泰山のふところ根を張っています。あなたと結婚することは、免絲(草に付く蔓)が女蘿(木に付く蔓)にまとわりつくようなものです。免絲といえどもは生える時節があり、夫婦が会するにも相応しい時期があるものです。千里の距離を隔てて婚約したものの、二人の間は広大な山陂に隔てられています。あなたのことを思えば老け込むような気持ちなつてしまいます。迎える車が来るのがどうしてこんなに遅いのでしょうか。傷つきそうな蕙や蘭の花も、蕾を含んで色彩を放っています。時期を過ぎても採らなければ、秋草の枯れるのと時を同じくして萎んでしまいます。あなたが本当に独身を高潔とすると、私はどうすればいいのでしょうか。

古詩十九首  
第九首

庭中有奇樹  
綠葉發華滋  
攀條折其榮  
將以遺所思  
馨香盈懷袖  
路遠莫致之  
此物何足貴  
但感別經時

ていちゆう きじゆあ  
庭中に奇樹有り、  
りよくよう かじ ひら  
緑葉 華滋を發く。  
えたよ そはな お  
條を攀じて其の榮を折り、  
まさ もう おも しろ おく  
將に以て思ふ所に遺らんとす。  
けいこう かいしゆう み  
馨香 懷袖に盈つれども、  
みちとお これ いた な  
路遠くして之を致す莫し。  
このものなん たらと た  
此物何ぞ 貴ぶに足らんや、  
たわか ととき へ  
但別れて時を經たるに感ずるのみ。

庭の中にめずらしい樹があり、緑の葉の  
中に華やかな花が咲いています。  
枝をひきよせ、その花を折り、思う人に  
贈りたいのです。  
芳しい香りは懷や袖に満ち溢れていて  
も、路が遠くて花を届けることができ  
ません。  
この花がどうしても大切なものというの  
ではなく、  
ただ、別れて、長い時が経っているのを感  
じるだけなのです。

古詩十九首  
第十首

迢迢牽牛星  
皎皎河漢女  
織織擢素手  
札札弄機杼  
終日不成章  
泣涕零如雨  
河漢清且淺  
相去復幾許  
盈盈一水間  
脈脈不得語

ちようちよう けんきゆうせい  
迢 迢たる牽牛星、  
きようきよう かかん じよ  
皎 皎たる河漢の女。  
せんせん そしゆ むき  
織織として素手を擢んで、  
さうさう きちよ ろう  
札札として機杼を弄す。  
しゆうじつしやう な  
終日章を成さず、  
きゆうてい お あめこと  
泣涕 零ちて雨の如し。  
かかん きよ か あざ  
河漢 清くして且つ浅し、  
あいさ ま いくばく  
相去る復た幾許ぞ。  
えいせい いっすい かん  
盈盈たる一水の間、  
みやみやく  
脈脈として語るを得ず。

遙かかなたの彦星、  
白く輝く天の川の織姫。  
織姫はか細い白い手で、淡々と杼を動かし機を織る。  
終日織つても綾織りの布地は出来上がらず、  
泪が雨のように流れ落ちる。  
天の川は清く澄んで浅いのに、  
離ればなれになつてどれほどの月日がたつたのだろう。  
水の満ちた一筋の川を挟み、二人はじつと見つめ合うだけで言葉を交わすこともできない。

古詩十九首  
第十一首

廻車駕言邁  
悠悠涉長道  
四顧何茫茫  
東風搖百草  
所遇無故物  
焉得不速老  
盛衰各有時  
立身苦不早  
人生非金石  
豈能長壽考  
奄忽隨物化  
榮名以為寶

くるま めぐ  
車を廻らして駕して言に邁き、  
ゆうゆう  
悠悠として長道を渉る。  
しこ  
四顧すれば何ぞ茫茫たる、  
とうふうひやくそう  
東風百草を揺かす。  
あ とまろ こぶつな  
遇ふ所 故物無し、  
いづく すみやか  
焉んぞ 速かに老いざるを得んや。  
せいすいのおお とまあ  
盛衰各々の時有り、  
りっしんはや  
立身早からざるを苦しむ。  
じんせい きんせき あら  
人生は金石に非ず、  
あによ なか じゆこう  
豈能く長く寿考ならんや。  
えんこう もの したが か  
奄忽として物に随つて化す、  
えいめい もう たから な  
榮名 以て宝と爲さん。

車を廻らせ馬に引かせ何処へ行くとい  
うこともなく、悠々として長い道を行  
く。  
四方を見渡せば広々とした景色が広が  
り、春風は一面の野草をゆり動かしてい  
る。  
目にするものは知らない物ばかり、どう  
して速やかに老いることができようか。  
人の盛衰にはそれぞれ遭遇する時節が  
あるものだが、立身出世が遅いのは苦し  
いものだ。  
永遠の金石とは違い、人には寿命があ  
り、いつまでも命を永らえることはでき  
ない。  
死はあつという間に訪れるのだから、名  
誉を宝として名を後世に残すのだ。

古詩十九首  
第十一首

廻車駕言邁  
悠悠涉長道  
四顧何茫茫  
東風搖百草  
所遇無故物  
焉得不速老  
盛衰各有時  
立身苦不早  
人生非金石  
豈能長壽考  
奄忽隨物化  
榮名以為寶

くるま めぐ  
車を廻らして駕して言に邁き、  
ゆうゆう  
悠悠として長道を渉る。  
しこ  
四顧すれば何ぞ茫茫たる、  
とうふうひやくそう  
東風百草を揺かす。  
あ とこころ こぶつな  
遇ふ所 故物無し、  
いづく すみやか  
焉んぞ 速かに老いざるを得んや。  
せきすいおのおとときあ  
盛衰各々の時有り、  
りっしんはや  
立身早からざるを苦しむ。  
じんせい きんせき あら  
人生は金石に非ず、  
あによ なか じゆこう  
豈能く長く寿考ならんや。  
えんこう もの したが か  
奄忽として物に随つて化す、  
えいめい もう たから な  
榮名 以て宝と爲さん。

車を廻らせ馬に引かせ何処へ行くとい  
うこともなく、悠々として長い道を行  
く。  
四方を見渡せば広々とした景色が広が  
り、春風は一面の野草をゆり動かしてい  
る。  
目にするものは知らない物ばかり、どう  
して速やかに老いることができようか。  
人の盛衰にはそれぞれ遭遇する時節が  
あるものだが、立身出世が遅いのは苦し  
いものだ。  
永遠の金石とは違い、人には寿命があ  
り、いつまでも命を永らえることはでき  
ない。  
死はあつという間に訪れるのだから、名  
誉を宝として名を後世に残すのだ。

古詩十九首  
第十三首

驅車上東門  
遙望郭北墓  
白楊何蕭蕭  
松柏夾廣路  
下有陳死人  
杳杳即長暮  
潛寐黃泉下  
千載永不寤  
浩浩陰陽移  
年命如朝露  
人生忽如寄  
壽無金石固  
萬歲更相送  
賢聖莫能度  
服食求神仙  
多為藥所誤  
不如飲美酒  
被服紉與素

くるま じやうとうもん か  
車を上東門に驅り、  
はる かくほく はか のぞ  
遙かに郭北の墓を望む。  
はくよう なん しょうしょう  
白楊 何ぞ蕭蕭たる、  
しょうはく こうろ はさ  
松柏 廣路を夾む。  
した ちんし ひとあ  
下に陳死の人有り、  
ようよう ちやうほ つ  
杳杳として長暮に即く。  
こうせん もと ひそ い  
黄泉の下に潛み寐ねて、  
せんさい とくしえ さ  
千載 長に寤めず。

こうこう いんようつ  
浩浩として陰陽移り、  
ねんめい あさうゆ  
年命 朝露の如し。  
じんせい こう よ  
人生 忽として寄するが如く、  
じゆ きんせき かた な  
寿には金石の固き無し。  
ばん さいじしよも あいおく  
萬歳 更も相送り、  
けんせい よ わた な  
賢聖も能く度る莫し。  
ふんしよく しんせん もと  
服食して神仙を求むれば、  
おほ くすり あやま ところ な  
多くは薬の誤る所と為る。  
しかず びしゅ の  
如かず美酒を飲みて、  
がん そ ひやく  
紉と素とを被服せんには。

車を走らせ、洛陽城の上東門に向かい、  
遙かに城郭の北の墓地を望む。  
白楊はもの淋しく、松や柏の木が広い  
路を挟むように立っている。  
下には昔死んだ人々があり、暗く長い  
夜を過ごしている。  
黄泉国でひっそりと床につき、永遠に目  
覚めることはない。  
四季の移り変わりは果てしもなく続  
き、人間の命など朝露のようにはかない  
ものだ。  
人生はたちまち過ぎ去るように、人間  
の寿命は金石のように無限ではないの  
だ。  
太古の昔から、人は互いに送り送られ、  
聖人や賢人もこの運命から逃れた者は  
いない。  
不老長寿の仙薬を求めても、多くはそ  
の薬のために命を失うことになるだけ  
だ。  
そんなことをするより、美酒を飲み、美  
服を着て、短い人生を楽しもうではな  
いか。

古詩十九首  
第十四首

去者日以疏  
來者日以親  
出郭門直視  
但見丘與墳  
古墓犁為田  
松柏摧為薪  
白楊多悲風  
蕭蕭愁殺人  
思還故里閭  
欲歸道無因

去る者は日に以て疎く  
きたる者は日に以て親しむ  
郭門を出でて直視すれば  
但だ丘と墳とを見るのみ  
古墓は犁かれて田と爲り  
松柏は摧かれて薪と爲る  
白楊 悲風多く  
蕭蕭として人を愁殺す  
故里の閭に還らんと思ひ  
帰らんと欲するも 道 因る無し

死んだ者は日に日に忘れられ、  
生きている者は日に日に親しさを増し  
ていく。  
城門を出て直視すれば、ただ丘と墳墓  
が見えるだけだ。  
古い墓は耕されて田となり、松や柏もい  
つかは切り倒されて薪となる。  
コヤナギの木は風に吹かれて悲しげに  
揺れ、その風情は私の胸を締め付ける。  
故郷に帰りたくは思うのだが、  
帰ろうにも、帰るすべが無い。

古詩十九首  
第十五首

生年不滿百  
常懷千歲憂  
晝短苦夜長  
何不秉燭遊  
為樂當及時  
何能待來茲  
愚者愛惜費  
但為後世嗤  
仙人王子喬  
難可與等期

せいねん ひやく み  
生年は百に満たず、  
つね せんさい うれ いた  
常に千歳の憂を懐く。  
ひる みじか よる なが  
日は短くして夜の長きに苦しむ、  
なん しよく と あそ  
何ぞ燭を秉つて遊ばざる。  
たの な まさ ととき およ  
楽しみを為すは當に時に及ぶべし、  
なん よ らいし ま  
何ぞ能く來茲を待たん。  
ぐしゃ ひ あいせき  
愚者は費を愛惜し、  
ただ こうせい わらい な  
但 後世の嗤と為るのみ。  
せんじん おうしきやう  
仙人 王子喬と、  
とよ き ひと  
與に期を等しうす可きこと難し。

人は百歳までは生きられないのに、常に  
千年先のことまで心配している。  
昼が短く、夜が長いのを苦にするなら、  
どうして燭を照らして遊ばないのだ。  
行楽の機会はつとめて逃さないように  
すべきだ。  
なぜ根気よく来年を待つ必要があるら  
うか。  
愚者は出費を惜しみ金に執着するが、  
ただ後世の笑い者になるだけだ。  
仙人となった王子喬のように、  
常人が不老長寿にあやかるとはでき  
ないことだ。



古詩十九首  
第十六首

凜凜歲云暮  
蟪蛄夕鳴悲  
涼風率已厲  
遊子寒無衣  
錦衾遺洛浦  
同袍與我違  
獨宿累長夜  
夢想見容輝  
良人惟古歡  
枉駕惠前綏  
願得長巧笑  
攜手同車歸  
既來不須臾  
又不處重闈  
亮無晨風翼  
焉能凌風飛  
眇眇以適意  
引領遙相睇  
徙倚懷感傷  
垂涕霑雙扉

りんりん 歳云暮れ、  
ろうこ ゆうべ なかな 蟪蛄夕に鳴き悲しむ。  
りようふう 率かに己に厲しく、  
ゆうしき 遊子寒くして衣無し。  
きんきん 洛浦に遣りしも、  
どうほうわれ 同袍我と違えり。  
ひとりしゆく 獨宿して長夜を累ね、  
ゆめ おも 夢に想うて容輝を見る。  
りようじん 良人古歡を惟ひ、  
がま 駕を枉げて前綏を恵む。  
ねがは 願くば長に巧笑するを得んと、  
て たすき 手を携へ車を同じうして歸る。  
すで 既に來りて須臾ならず、  
またちようい 又重闈に處らず。  
まご 亮に晨風の翼無し、  
いづく よ 焉ぞ能く風を凌いで飛ばん。  
べんらい 眇眇以て意に適ひ、  
くひ ひ 領を引いて遙かに相睇む。  
しいい 徙倚して感傷を懷き、  
なみだ た 涕を垂れて雙扉を霑す。

身も凍える寒さとなり、歳も暮れ、ケラが夜  
悲しげに鳴く季節となりました。  
冷風は急に厳しさを増し、旅先の夫に寒さ  
をしのぐ衣服はありません。  
「錦の衾を神女のいる洛浦に送る夫あり」と  
いう諺どりの優しい夫ですが、二人は今、  
そうした境遇の夫婦ではなくなつてしまいま  
した。  
ひとり寝の長い夜を重ねていると、夢の中で  
想いがつのつてうるわしい夫の姿を見るので  
す。  
夢の中で、いとしい夫は、昔の楽しさを思い出  
し、車を私の所に寄せ「乗りなさい」と、つり  
ひもを差し出すのです。  
叶うなら、いつまでも笑顔でいたいと思いな  
がら、手を携えて同じ車で帰つて來たのです。  
やがて家に帰つて來たと思つたらすぐに夢か  
ら目覚め、やはり夫はこの奥の部屋には居な  
いのです。  
もし私に隼の翼があれば、風を凌いで、夫の  
ところへ飛んでいけるといふのに。  
振り返つてあたりを見直し、気を取り直し、  
首を伸ばして遙かあなたを眺めるのです。  
その場を去ることもできず、悲しみを抱いた  
まま、流れ落ちる涙は左右の門扉を濡らす  
のです。

古詩十九首  
第十七首

孟冬寒氣至  
北風何慘慄  
愁多知夜長  
仰觀衆星列  
三五明月滿  
四五蟾兔缺  
客從遠方來  
遺我一書札  
上言長相思  
下言久離別  
置書懷袖中  
三歲字不滅  
一心抱區區  
懼君不識察

もうとう かんきいた、  
孟冬 寒氣至り、  
ほくふう なん さんりつ  
北風 何ぞ慘慄たる。  
うれいおお よる なが  
愁 多くして 夜の長きを知り、  
あお しゅうせい つらな み  
仰いで 衆星の列るを觀る。  
さんご めいげつみ  
三五 明月滿ち、  
しご せんとか  
四五 蟾兔缺く。  
きやく えんほう  
客 遠方より來り、  
われ いしよ さう おく  
我に一書の札を遣る。  
かみ なが あいおも  
上には長く相思ふと言ひ、  
した ひさ りべつ  
下には久しく離別すると言ふ。  
しよ かいしゅう うち お  
書を懷 袖の中に置き、  
さんさい  
三歳なるも字滅せず。  
いらしん くく いた  
一心に區區を抱き、  
きみ しきまつ  
君の識察せざらんことを懼る。

冬の初、寒氣が訪れ、北風の寒さのなんと厳しいことでしょうか。  
愁いが多いためか、眠れず夜の長さに堪えかね、夜空を仰いで多くの星が列なっているのを見えています。  
十五夜に月は満月になり、二十日になると月は欠ける。  
遠方から來た客が、わたしに一通の手紙を届けてくれました。  
手紙の始めには「いつまでも思っている」とあり、終わりの方には「もうしばらく別離が続く」と書いてありました。  
この手紙を懷に入れたまま、三年になるけれど、文字は消えずにいます。  
一途に思う女心を、あなたが察してくださなくなるのを恐れているのです。

古詩十九首  
第十八首

客從遠方來  
遺我一端綺  
相去萬餘里  
故人心尚爾  
文彩雙鴛鴦  
裁為合歡被  
著以長相思  
緣以結不解  
以膠投漆中  
誰能別離此

客 遠方より来り、  
我に一端の綺を遣る。  
相去ること萬餘里なるも、  
故人の心 尚ほ爾り。  
文彩は雙鴛鴦、  
裁ちて合歡の被と為す。  
著するに長相思を以てし、  
縁どるに結不解を以てす。  
膠を以て漆中に投ぜば、  
誰か能く此を別離せん。

遠方から来た客が、わたしに一反の文  
絹を届けてくれました。  
旅立つて、万里の彼方に行ってしまったの  
に、あの人は昔の心のままだという証な  
のです。  
布地の織り模様はつがいの鴛鴦(おしど  
り)、これを裁つて共寝の夜着にしましよ  
う。  
切れ目ない綿を詰め、縁は決して解け  
ない糸で縫いましょう。  
ニカワを漆の中に投げ入れれば、誰もこ  
れを別々に離すことはできないように、  
わたしたち夫婦も強い絆で結びついてい  
るのです。

古詩十九首  
第十九首

明月何皎皎  
照我羅床緯  
憂愁不能寐  
攬衣起徘徊  
客行雖云樂  
不如早旋歸  
出戶獨彷徨  
愁思當告誰  
引領還入房  
淚下沾裳衣

めいげつ なん きやうきやう  
明月 何ぞ皎 皎たる、  
わ うすきぬ しょうい てら  
我が 羅の床緯を照す。  
ゆうしゆう あた  
憂愁して寐ぬる能はず、  
ころも と た はいかい  
衣を攬りて起つて徘徊す。  
きやうこう たの いを  
客行 樂しと云ふと 雖も、  
はや せんき  
早く旋歸するに如かず。  
こ い ひと ほうこう  
戸を出で 獨り彷徨するも、  
しゅうし まき だれ  
愁思 當に誰にか告ぐべき。  
くひ ひ かえ ほうい  
領を引き 還りて房に入れば、  
なみだくだ しょうい うるお  
涙下りて 裳衣を沾す。

名月はとても白々と明るく、  
わたしのベッドの薄絹の垂れ幕を照らして  
います。  
旅の夫を思うと憂いと悲しみで眠ること  
ができず、衣を羽織り、起きて徘徊  
するのです。  
あなたは旅は楽しいと言ってくれど、早  
く帰るにこした事はありません。  
戸口を出で、ひとり彷徨い歩いても、こ  
の愁いの思いを告げる人はいないので  
す。  
首を延ばして遠くを望み、帰って部屋に  
入れば、流れる涙は衣裳を濡らすので  
す。